



2007.6.20 発行: No.57
TEL 03-3985-2628
立教大学図書館

社会科学系図書館、リニューアルオープン!

社会科学系図書館では2007年2月中旬から1階の改修工事を開始し、この4月5日にリニューアルオープンしました。どんなところが変わったのか、ここで簡単に紹介します。

まず、閲覧席です。これまで1階部分には12席しかありませんでしたが、このたび閲覧スペースを拡張し118席を増設して、130席にしました。(窓側のカウンター形式が18席、4人掛け机が10台で40席、6人掛け机が12台で72席の合計130席)。これによって、より多くの利用者に閲覧席をご利用いただけるようになりました。また1階の閲覧席には全てLANの接続口と電源がありますので、ご自分のパソコンを接続してインターネットを利用できます。

次に図書資料の配置です。入口から閲覧席を抜けて一番奥の部分に2ヶ所、開架の集密書庫を設置しました。突き当たりのブロックには新聞(日本語、外国語)、左奥のブロックには有価証券報告書と和洋加除資料(法令、法規、資料、実務書)を配しています。特に新聞は4大紙(朝日、読売、毎日、日経)を縮刷版から最新版まで全て1階でご覧いただけるようになりました。



閲覧席を増設した社会科学系図書館1階

目 次

社会科学系図書館、リニューアルオープン!	p 1
『竹取物語絵巻』を購入しました	p 2
絵巻に託されたメッセージ	p 2
『竹取物語』と浅井了意	p 3
立教大学所蔵『竹取物語絵巻』をめぐって	p 3
かぐや姫の物語と絵の本棚	p 4

なお地下1階の開架スペースの参考図書、雑誌、紀要類の配置は以前と変わりありません。1階集密書庫に資料を移動したことにより、空いた地下1階の開架スペースには順次一般図書を配架しております。これにより、各分野の新刊書をより多く直接手にとってご覧いただけます。

みなさんに快適な空間をこれからも提供していきたいと考えております。

それでは社会科学系図書館でお会いしましょう。

『竹取物語絵巻』を購入しました

立教大学文学部教授 小嶋 菜温子

このたび、立教大学図書館では『竹取物語絵巻』を購入しました。2006年度の文部科学省の補助金交付を受けての収集品です。日本の古典遺産として、『源氏物語』をはじめとする多くの物語作品があることは知られていますが、『竹取物語』もその一つです。国宝の『源氏物語絵巻』の一部は名古屋の徳川美術館と東京の五島美術館に分蔵されていて、ときおり展観されていることはご存じでしょう。惜しむらくはその国宝絵巻の全巻がそろっていないことですが、ことほどさように古典を保存することは容易なことではありません。それだけに、かろうじて残された文化遺産のありがたさがあるわけです。『竹取物語』は『源氏物語』にまさるとも劣らぬ知名度があるにもかかわらず、絵画的な資料の数は限られています。立教大学蔵『竹取物語絵巻』は、きわめて貴重な逸品なのです。

『竹取物語』は、かぐや姫の話として人口に膾炙してきました。竹の中から生まれ、月に帰って行く、美しい人——神秘的な絶世の美人、かぐや姫はテレビCMなどでも常連のキャラクターですね。いったい、この世の者ならぬ美しいそのイメージは、日本の社会のなかでどのように育まれてきたのでしょうか。また、そのイメージに託された人々の想いはいかなるものであったのか。そのことを知るには、平安時代に成立した『竹取物語』をよく分析することが大事であると同時に、その後の時代の享受史を辿ってみることも必要になります。その点で、『竹取物語絵巻』は重要な資料としての価値を持っているわけです。立教大学蔵『竹取物語絵巻』から日本文化史の成り立ちの一端を浮き彫りにする——そうした期待が高まります。

※編集者注記：『竹取物語絵巻』は図書館にて近日展示予定です。

また、デジタル化し、ウェブサイトに公開する準備をしております。

作品紹介
1

絵巻に託されたメッセージ

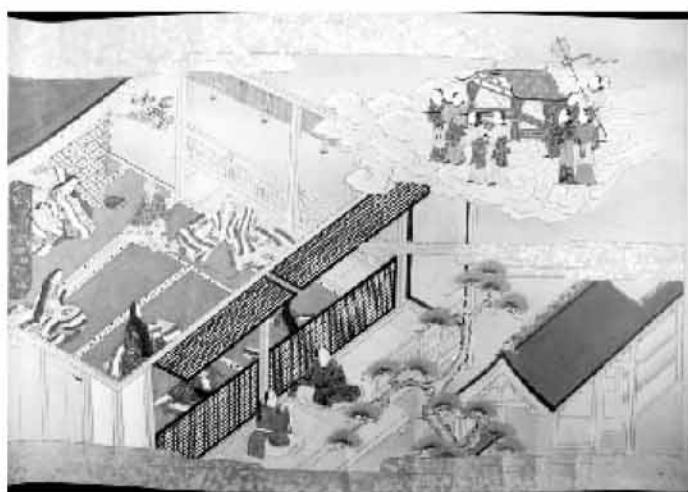
文学研究科
博士課程後期課程 青木 慎一

絵巻の魅力の一つには文章もさることながら、絵の存在が大きいだろう。立教大学蔵『竹取物語絵巻』は上・中・下巻の三巻で、18場面の絵を含んでいる。ここでは「かぐや姫の昇天」の場面を取り上げたい。地上における贖罪を終えたかぐや姫を迎えて、月からの使者がやってくるという、かぐや姫のストーリーのなかでもよく知られた部分である。

写真では画面右上に輿を持った天人がいる。画面左側に描かれた邸の中には、左上からかぐや姫、その右に翁、そのまた右に嫗が配されている。さらに細かく絵をみていくと、輿を持ってやってきた天人は九人ほどである。そして、天人へ視線を送る翁と嫗の衣装は、夫婦とは思えないほど対照的に見える。翁は室外にいる二人の従者よりも地味な格好をしているのに対し、嫗はかぐや姫に負けず劣らず豪奢な衣装に身を包んでいる。

現在、『竹取物語絵巻』は十数点の現存が確認されているが、それらは全く同じものでなく、絵や本文にある程度の違いを持っている。「かぐや姫の昇天」を例にとると、嫗の衣装が翁と同様に地味に描かれる場合や、かぐや姫を迎えて来る天人が三人ほどの場合、画面右下の屋根の上にかぐや姫を守るべく遣わされた衛士が描かれる場合などもある。

さらには、すでにかぐや姫が輿の中に描かれ、見送る翁と嫗が嘆き悲しむ様子を描くものもある。このような違いは、絵巻制作に関わった注文主や絵師たちの意図によるところが大きいだろう。それがどのような意図であったかを考えながら、絵巻を鑑賞してみるのもまた一興ではなかろうか。



『竹取物語』と浅井了意

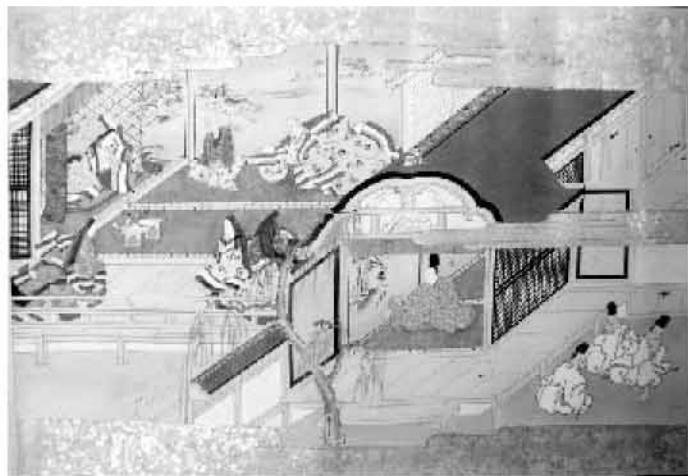
立教大学兼任講師 宮腰 直人

江戸時代、『竹取物語』は多くの読者を得ていたことが想像される。とりわけ、現存する絵巻や絵本の多さは特筆に値し、挿し絵とともに愛好された物語であったことがわかる。本文が比較的異同が少ないので対し、挿し絵は諸本により場面選択をはじめ異同が多いことが注目される。一方で、近世初期の古活字版や絵入り版本でも刊行されていた。『竹取物語』は様々なメディアによって読まれていたのである。その読者のなかには、たとえば、後に作家になる者もいたのに違いない。

浅井了意（？～元禄4年（1691）没）は『東海道名所記』や『浮世物語』などで知られる仮名草子の作家である。彼の代表作『伽婢子』（寛文6年（1666））の序文には、『大和物語』や『宇治拾遺物語』、『うつほ物語』とともに『竹取物語』への言及がある。了意は、これら「怪く奇特の事共をしるせる」物語に対し、自らの怪異小説『伽婢子』の意義を説いてゆくのだが、さて、了意の念頭にあったのは、どんな『竹取物語』であり、彼はどこに「奇特」を見出したのだろうか。

近年、了意自筆の『源平盛衰記』が紹介され、同筆とおぼしい絵巻の作例が数点知られるに至っている。どうやら了意は幾つもの絵巻や写本の本文を写していたらしい。了意が、あれこれの物語に触れる機会をもっていたとする『竹取物語』に接することもあったかもしれない。

了意が活躍していた17世紀後半は、ちょうど『竹取物語』の絵巻や絵本が制作された時期と重なる。了意やその同時代の人々はどんな思いで『竹取物語』を読んだのか。描かれた『竹取物語』を見るたび、その疑問を解く鍵は、絵巻や絵本の多様な挿し絵にあるような気がしている。



立教大学所蔵『竹取物語絵巻』をめぐって

文学研究科
博士課程後期課程

目黒 将史

立教大学所蔵『竹取物語絵巻』は三軸の美麗な絵巻である。特に絵巻の一紙目に力を注いでいるようで、一紙目の料紙に金泥で描かれる下絵は、三軸共にすばらしく、目を見張らせるものがある。この立教大本と類似の絵巻に、諫訪市立博物館所蔵の『竹取物語絵巻』がある。立教大本と諫訪博本とを比較してみると、絵巻の法量は同じであり、料紙、表紙の色・紋様などが酷似している。成立において、何らかのつながりがある可能性も考えられる。

ここで立教大本の絵画の特徴を挙げてみたい。大きな特徴の一つとして、かぐや姫が赤い布にくるまれ、大きな「箱」で育てられている画面を取り上げてみる。『竹取物語』本文には、「いとおさなければ籠に入れて養ふ」とあり、他の絵巻では「籠」で育てられているものも多い。かぐや姫の両脇には翁と嫗といふが、さらに画面の右手をみると、館入り口の柴垣の前に三人の女児が描かれている。諫訪博本では、かぐや姫の周りで遊ぶ子供たちが描かれるように、他の絵巻でも子供たちが登場するが、柴垣の前に描かれる例は珍しい。女児たちは、かぐや姫と一直線に描かれる。入り口付近の女児は、かぐや姫を指さし、後ろの子に話しかけている。一番後ろの女児は、室内のかぐや姫を手をかざして見ているようで、絵を右から巻きながら見ていく観者の視線がおのずと左手の室内のかぐや姫に凝縮されるように描かれている。



諫訪博本は松平定信の娘烈子が高島藩主諫訪家に嫁いだ際の婚礼道具の一つとして知られている。立教大本も諫訪博本と同様、嫁入本としての性格を持つものであると思われる。「箱入り娘」ならぬ「箱入りかぐや姫」は、嫁ぐ娘たちの血統を暗示させる恰好の造形であったのかもしれない。

かぐや姫の話の謎を解く楽しみは、奥深いものがあります。『竹取物語』を知るための手引き書をあげましょう。専門的なものと、一般向けのものと一冊ずつです。

*『かぐや姫幻想』 小嶋菜温子著、森話社、2002年

*『えんぴつで脳を鍛える 竹取物語』 小嶋菜温子著、宝島社、2007年

絵と物語の関わりから考えるのも面白いです。『竹取物語絵巻』の図録類です。日本国内だけでなく、海外のコレクションにも貴重な絵巻や絵入り本が所蔵されています。

*『図説日本の古典5 竹取物語・伊勢物語』 片桐洋一著、集英社、1978年

*『竹取物語』 佐藤昭編、学習研究社、1988年 ☆

*『甦る絵巻・絵本 チェスター・ビーティー・ライブラリ所蔵 竹取物語絵巻』 小嶋菜温子編、勉誠出版、近日刊行予定。☆

『竹取物語絵巻』の専門書のなかの基礎文献。

*『竹取物語絵巻の系譜的研究—橘守部作同絵巻への展開—』 德田進著、桜楓社、1978年

『竹取物語絵巻』にかぎらず、海外に所蔵されている貴重な物語の図像資料のカタログ。

*『在外奈良絵本』 奈良絵本国際研究会議監修、角川書店、1981年

*『チェスター・ビーティー・ライブラリ 絵巻絵本解題目録 図録篇・解題篇』 国文学研究資料館チェスター・ビーティー・ライブラリ編、勉誠出版、2002年

絵と物語の関連を考えるのは『源氏物語』の研究においても最先端のものです。

*『繪入本源氏物語考 上・中・下』 吉田幸一著、青裳堂書店、1987年

*『源氏文化の時空』 立石和弘・安藤徹編、森話社、2005年

*『描かれた源氏物語』 三田村雅子・河添房江編、翰林書房、2006年

また、中世の物語を集めた『御伽草子』もふくめて、絵と物語の関連は以下の研究を参照。

*『魅力の御伽草子』(石川透編、三弥井書店、2000年)

*『御伽草子 その世界』(石川透著、勉誠出版、2004年)

*『魅力の奈良絵本・絵巻』(石川透編、三弥井書店、2006年)

文字で書かれた物語と、それを図像化してできあがるイメージとが響きあって、日本の文学史・文化史は豊かに彩られてきました。それはそのまま、わたくしたちの心の中のイメージのありかたにつながっていることは言うまでもありません。

なお、立教大学蔵『竹取物語絵巻』の詳細は以下の通り。

宮腰直人・目黒将史・青木慎一「立教大学蔵『竹取物語絵巻』解題・翻刻」

『立教大学大学院 日本文学論義 七号』近刊予定。

(リスト作成協力: 石井宏枝・酒井朱夏(立教大学文学研究科 博士課程前期課程1年))

※文中で紹介した資料のうち、☆印以外のものについては、立教大学図書館で所蔵しております。

なお☆印のものについても所蔵予定です。

以上の資料は図書館ウェブサイト「読書ナビ」に掲載します。

開館日程等については図書館のホームページでご案内しております。

なお、新座図書館は5号館工事のため、8/3、9/18に臨時休館します。

(<http://opac.rikkyo.ac.jp>)

※その他変更がある場合はその都度、掲示でお知らせします。